

慈濟 229 ものがたり

TZU CHI ● ツーチー



慈濟基金會
2016年1月

2016 ● 1

慈濟ものがたり

N O 2 2 9

慈濟基金會



今月の表紙

人生で私たちが私になつた世

あの日の余話は普段と変わらぬものだつたが、それが最後の記憶となつた。いつ機会のなかつた言葉を伝えたいと思つても、今となつてはもうどうしようもない。

(総・蘇芳靈)

表見返し●

文・證嚴法師／訳・濟運／撮影・李白士

広く純粹な心を一つに助け合う

広く純粹な心を一つにして助け合えば
心軽やかに安らぎを覚え
めでたく幸福が訪れます

広く純粹な心を一つにして助け合えば
心軽やかに安らぎを覚え
めでたく幸福が訪れます

感動して執着心をなくせば
自在になれます

感動して執着心をなくせば
自在になれます

慈しみと平等の心で臨めば
めでたい結果が得られます

和氣
広い心で大きな願をかければ
最大の幸福が得られます

互愛
限りなく純粹な心で臨めば
心が軽やかになります

協力



目次

慈濟の法海に入る	慈願／訳	4
【世論】		
人生で私たちが私になつた時 夢の中で彼がないことに気づいた 〔相談室〕	済運／訳	8
別れを告げられなかつたのが心残り	済運／訳	26
【人医の愛】		
障害者の口の健康を守る(上)	黒川由希／訳	40
【特別報道】		
□トルコに安住を得て	慈願／訳	54
□この世にはまだ善も美もある	慈願／訳	62
中年の収穫	慈願／訳	66
【證厳法師のお諭し】		
地球温暖化が緩やかになるよう 共に認識を深め、共に歩こう	慈願／訳	78
【質問箱】		
中年の収穫	慈願／訳	66
【喜びの発見】		
善縁の起点	慈願／訳	82
【衲履足跡】		
戦勝の欲望	慈願／訳	104
【お仮さんが法の香に漫る】		
誰にも同じ日の光	黒川章子／訳	96
慈濟大事記【十一、十二月】	慈願／訳	107
広く純粹な心を一つに助け合う	済運／訳	107
静思語 虞愍／訳	済運／訳	53
漫画 済運／訳 表見返し	済運／訳	
裏見返し		

慈濟の法海に入る

◎訳・慈願

毎年の年末は、慈濟研修委員が待ち望む一刻だ。その日は證嚴上人が自ら委員に認証と「福慧の年玉」をお渡しする日で、委員として菩薩道を歩む指標の象徴でもある。今年は中国から六百人以上の委員が台湾へ認証を受けにきていた。彼らは現地で精神研修を終えた後、台湾へ帰ってきて、上人の祝福を受け、慈濟の法海に加わるという願を果たす。

広大な中国大陸において東西南北、各々の省から慈濟人が一同に集まるとは滅多にないことで、慈濟が半世紀近くにわたる足跡をふり返つてみると、長期にわたる利他の奉仕の中で、慈濟人たちは菩薩の情と経験を分かち合つてい

た。法の仲間は情を以て互いに関心を寄せ合い、着実に法の体験を以て励まし合い、菩薩の種子を隅々まで普及してきている。

多くのボランティアはすでに仏法に触れていたが、慈濟を知つてからは「やつている中で学び、学ぶ中で悟る」という法門経験を積み、慈濟人の変化に富んだ気質と品格を吸収している。彼らを慈濟に招き入れたのは、台湾から当地に渡った台湾ボランティアたちである。ボランティアを希望する人たちを、十数年の長きにわたって「難行でもあきらめずに」の心得で、細心に関心を寄せていた感動が多くの現地ボランティアを引きつけ、また彼らは長い研修の試練に耐えてきた。

台湾にきてからの精神研修過程では、中国のボランティアが各地の慈濟支部、環境保全センターを見学し、心靈の故郷である静思精舎を訪れて上人にお会いした。精思精舍の尼僧たちや無数の慈濟人が黙々と奉仕している堅実な姿

は、ところどころで生命価値の法益が啓発され、それに追従しようとの眼力を深めた。

この度の精神研修会の中で精思精舎の尼僧は、「得難い人の身を得た上に名师に出会って仏法を聴くことができたのは貴重な因縁である。法を聴いて最大を得られるのは自分自身で、生活の中で出会う紆余曲折も喜んで受け入れ、自分には福のあることを悟つて、煩惱を転じて菩提になり、福を知り、福を大切にして、さらに造福をするように」と励ました。

ボランティアたちにもこれに似た経験があった。いかに子供たちに正しい人生観を示すことができるか、慈濟に入つてからその方向を見出すことができた。そして、子供たちが良くなるにはまず自分を変えなければならないことに気づいていた。子供たちは父母が変わったことを見て、自然にその変化を受け

ることができるのだと。またある人は慈濟に入る前は自分が、まだ本当に家族を思いやつていなかつたことを悟つて、人を愛することを学び愛の力の偉大なことを発見した。

ボランティアは奉仕の中で、生老病死の繰り返しと因縁果報をはつきりと見、人として生を受けたからには戒め、慎み、悪縁を造らぬよう自分を戒めている。日常生活の中で悪を受けていなくても、己の習氣じつけに束縛されていれば、心を平静に保つことができない。慈濟の道場で修行し、習気を取り除いて常に善念に向かつて、正確な道に自信を持って前進し、さらに良い人になるように。

多難の世間において、天災戦火が絶えない時、必要なことは人々の心に明るい火を灯し、希望を与えることだ。慈濟の法海に入つて、灯を無尽に伝えよう。

人生で私たちが私になつた時

あの日の会話は普段と変わらないものだったが、それが最後の記憶となつた。言う機会のなかつた言葉を伝えたいと思つても、今どなつてはもうどうしようもない。

ある日、やつと彼のことを話せるようになつた。

笑顔の中に涙を浮かべ、彼が帰ってきたような気がした。

かつて彼が存在していたことを感じると同時に、今はもうないことを知つた。



(イラスト・蘇芳需)

傅心怡は今でも左の薬指に結婚指輪をはめている。毎日はめているのですかと聞くと、「その日、その日の気分ではめたり、はめなかつたりします」と答えた。彼女と初めて会った人はいつも、「結婚してますか?」「子供はいるのですか?」と興味を持つて聞く。彼女はいつも正直に、「結婚しています」「子供はいません」と答える。もし、相手がさらに心配してくれるなら、「若いうちに子供を産んだ方がいいですよ。でないと、育てるのが大変ですから」とつけ加えてくる。彼女はいつも「はい、分りました」と笑顔で答える。

消防隊員だった黄育隆と結婚した時、「主人は亡くなりましたとは言えません」。相手が遅かれ早かれ真実を知るだろうとは思うが、こちらからそれを言いたくはなかつた。会話が気まずくなり、互いに話が続けられなくなるのを避けるためであり、また、憐れみの眼差しで見られたくないからだ。

友人たちは危険と隣り合わせの職業だと彼女に言つたことがあるが、彼女はそう思わなかつた。「消防隊員はとても必要とされる仕事です。なぜ他の人ならよくて、自分の家族がなつてはいけないのでですか? 私はそんな身勝手な人間になり



夢の中で 彼がいないことに気づいた

全ての飾りつけは前とほとんど同じだった。

まるで夫がまだこの世にいて、次の瞬間、満面の笑顔で部屋に入って来るかのようだった。

いつも彼に会えるような気がして、幸せな感じがした。

でも、幸せを大きく感じれば感じるほど、心の痛みも大きい。

◎文・鄭雅嬬／訳・濟運／撮影・顏霖沼

たくありません

結婚して三年が過ぎた二〇一三年二月、旧正月の三日目、黄育隆は任務の中に殉職した。享年わずか三十七。起きてはほしくなかつたことが起きてしまつた。

別れの時
抱きしめ合つて愛をささやいた

黄育隆が亡くなつて二年半近くになるが、傅心怡は今でも夫の両親と暮らしている。夫婦で使つていた部屋には特種捜索救助隊の制服がかけてあり、笑顔が溢

れた二人の結婚写真と数多くの思い出の物が卓上に置かれてあつた。
家具も物も以前とほとんど変わらない位置に置いてあり、まるで夫がこの世に存在していて、次の瞬間、満面の笑顔で部屋に入つて来るようだつた。

同じ一九七七年生まれの二人は知り合つて一年足らずで結婚し、その後もずっと仲睦まじかつた。育隆との思い出を話す時、傅心怡の表情はとても豊かで、いつも幸せな笑顔を見せた。「私たちはよく公園でデートし、風に吹かれながら話したり果物を食べたりするだけで満足でした。彼はとても儉約家で、デートする時、

いつも消防隊員が自分たちで作った普段着にビーチパンツ、サンダルという格好で、ベンキがついていたりしても気にせず着ていました」

また、彼女は彼が毎月の給料の五分の一をいくつかの慈善事業団体に寄付して

いたことを知り、びっくりすると共に心を打たれた。「心地よい言葉を聞くのは簡単ですが、実践するのは容易ではありません。彼はふだん節約してでも人の役に立とうとしていました。そういう人は多くありません

育隆は自然体で義理の両親と世間話を

し、マッサージしたり農作業の手伝いや犬の散歩、家で必要になつた家電の買い物を手伝つた。両親は彼のことを讃美称えた。心怡が早起きして「暁の鐘に目覚め、法の香りに浸る」活動に参加するため、彼は細心に彼女のために遠くからでも見えるリフレクション機能のあるジャケットを選び、安全のために着るようになつたのに、結局喧嘩別れしたのは価値観

と頼んだ。そして、彼女が仕事から疲れて帰つて来ると、彼は積極的に彼女の悩みを聞いた。また、二人はよく寝る前に互いに一日の出来事を話し合い、面白いことになると大きな声で笑うので、同居している家族はつられて笑顔がこぼれたものだ。

「家庭教育の影響でしょうね。彼は毎日、極自然に愛情表現をし、抱きしめてから『愛してるよ。結婚とは良いものだね。一緒に生活できてよかったです』と言いました」。育隆の自分に対する愛を語ると、傅心怡の目には見る見るうちに涙があふれ、複雑な心境になつた。

事故の前日、彼女が花蓮でボランティアするため、育隆は駅まで送つて行つたが、別際いつものように抱きしめて愛の言葉をささやいた。それが最後に会つた時だつたと傅心怡は後で気がついた。

結果が心に波紋を起した

「私たち二人はとても幸せでした。彼が事故に遭つたと聞いた時のショックは、天国から地獄に堕ちたようでした」

年末、花蓮にいた傅心怡は知らせを受け、すぐに台北に向かつた。夫の両親は海外旅行中で、実家の両親は遠く屏東にい

一人旅

幸運にも彼に会え、互いにこのような縁と一緒にだった平凡な日々をとても大切にしていました。それ以上の贅沢な望みはありませんでした。彼が突然、この世を離れ、私が一番にしなければならない心の調整は、あきらめきれないことに執着しなくなることだと思います。

「彼らは非常に仲の良い夫婦だったので、私はとっさに、心怡に本当のことを話してはいけないと思いました。でないと、彼女は耐えられないと思ったからです」

顏湘婷はこれまで悲痛に暮れる人の世話をしたことにはなかつたが、相手の気持ちは思つて、病院の入り口で傅心怡をメ



●黄育隆が亡くなつて3年近くになるが、傅心怡は今でも部屋に飾った2人の写真などを以前のままに飾っている。まるで夫が側で自分を支えてくれているように思える。

デイアの取材から遠ざけ、彼女と一緒に救急外来へ付き添つた。そして、彼女は「育隆は今、あなたの祝福を一番必要としているの」と伝えた。

その時点では、傅心怡は育隆を抱きしめながらも一縷の望みを抱いていた。彼女は時間も疲労も空腹も忘れ、家族が揃い、顏湘婷が彼女の耳元で「もし駄目だったら、逝かせてあげたらどうかしら?」とささやくまで、彼の耳元で祝福と励ましの言葉を言い続けていた。だがその時、初めて応急処置しても助からない残酷な現実に突き当たつた。

その衝撃的な瞬間を思い返せば、傅心

怡は幸いにもボランティアの付き添いがあり、夫と対話し、ショックを和らげる時間がつた。『どうして駄目なの?』と強く思いましたが、突然計報を聞くよりは受け入れられました』

悲しみに暮れる彼の両親は、丸一ヶ月間、葬儀の段取りをすることで子供に対する無念と追憶を表した。その間も慈濟ボランティアが付き添つた。葬式の日、総統から育隆への表彰状が贈られると同時に小隊長に昇進し、忠烈祠に祀られることになった。全国から約千人の消防隊員が集まり、最後の別れを告げた。

傅心怡は自分で十五分間の追憶の映像

を作成し、文字と写真に歌をつけて、もう一度二人の過去を辿った。「これは彼に対する私ができる大切なことです。作成中はとても辛く、泣きっぱなしでした」

どんなに回想の映像に対する情が濃く、表彰や遺族扶助金が多く、葬儀が盛大であっても、全ては育隆が火葬された後、灰と化してしまう。生きている者の長い悲しみはその時から始まるのだ。

温かくも差し出がましくない気遣い

傅心怡は喪に服した期間を過ぎた後、

どういう表情で心配してくれていた家族や友人に会つたらいいかを心配していたことを今でも覚えている。彼女は長い間、マスクをかけ、顔の半分以上を覆つて人と会うようにしていたが、それで少しは心が落ち着いた。知覚や感受性が失われたように、身の回りのあらゆることに対して冷淡になり、滅多に笑顔を見せなくなつた。

「毎日、針のむしろに座らされているようでも、とても辛かったのです。皆、善意で各自の方法で心配してくれ、自分でも皆の思いやりに向き合わなければいけないと分かつてはいましたが、なかなかそ

の第一歩が踏み出せませんでした

「近頃どうですか?」「大丈夫ですか?」普段ならこれ以上普通の思いやり以外の何物でもない言葉が、その時は心に重くのしかかる言葉になつていて。また、事情を知っている人や他人の不用意な眼差しが彼女の過敏になつた神経を逆なでした。

しかし、親しい人の思いやりのある行動は彼女の心を温めた。友人の携帯からの音のない見舞いのメッセージや、学校に出勤して、同僚が彼女のために教室や周囲の環境を美化したり整理してくれたことなどである。成人教育クラスでは、学

一人旅

他人が気遣ってくれるのは分かるのですが、相手にどういう表情で向き合つたらいいのか分らないので怖かったのです。自分から心配してくれている人たちに向かわなければいけないと分かっていても、その一步を踏み出すのが難しく、そのことでさいなまれ、とても辛かったです。

生たちは暗黙の了解の下に、そのことに
関して口にすることはなく、いつものよ
うに楽しく授業を受けていた。

ある時期、彼女は約十五日に一回の割
合で育隆の夢を見たが、夢では一人の現
実的な生活が出てきたので、つい彼が死
んでもういないこと忘れてしまうの
だ。

「ある日、夢の中で彼に『私、近頃、よ
くあなたのことばかり考えるの』と言つ
ていました。しかし、それを言い終わる
と夢の中の私は突然、『思いだした！ あ
なたは死んだのよ。行かないで！』と気
づいたのです。私は無理矢理彼の手を握

つたのですが、彼はすごい力で私の手を
ふりほどきました」
その頃、彼女は育隆がまだ存在してい
たように感じ、部屋に戻ると、以前のよ
うに二人で話したいことを口にした。
怖かった時間は過ぎ、忙しい毎日が彼
女に育隆への思いを薄れさせた。彼女は
半年の間、記憶に残っている二人の間の
会話や彼に関する一切のことを記録に留
めた。

記憶は彼女とかくれんぼでもしている
かのように、時々突然、二人の結婚記念
日、育隆の命日のような大事な日やその
事自体を忘れてしまうのだ。「それは何か

セキュリティーシステムのように感じら
れ、突然、何もかもなくなってしまいます
が、別の日にまた、思い出すのです。そ
れに対して罪悪感のようなものは感じま
せん。心の奥底では彼をとても愛してい
て、全て覚えていることを知っているか
らです」

涙も笑いも過ぎ

新たに人生に邁進する

「私が育隆に悪運をもたらしたのだろ
うか？」「一人で生きて行くのは辛い。彼
と一緒にこの世を去れたらどんなにいい

だろう？」傅心怡は今までこんな入り乱
れたあきらめきれない考えが頭の中を巡
っていたが、迷い込むまでいかなかつた
のは、結婚してから続けてきた「法の香
りに浸る」活動で仏法の智慧を吸収して
きたからである。以前、彼女はよくノー
トを片手に育隆に仏法を聞いて来た後の
喜びを話して聞かせ、日常生活の中に仏
法を取り入れて互いに注意を喚起し合つ
た。「生老病死のことは知っており、人生
で必然的に起きることだと分っていたつ
もりでしたが、いざその状況に遭遇する
と、突然、それを受け入れられなくなる
ことに気づきました」

やがて悲しみで眠れなくなつたが、テレビで「静思晨語」を見たりお経を読んだりして一人の時間を増やし、心の静けさを保とうと努めた。

彼女は、育隆があまりにも早く逝つてしまい、一緒に仏法を聞けなかつたことを残念がつた。その後、彼女は彼の毎月の寄付を続けるほか、彼の遺族扶助金で栄養役員になり、慈濟と縁を結ぼうと家族で決めた。「彼はとても善良で、善行するの自然な行動なのです。もし、来世があるとすれば、仏法の智慧を学ぶのを忘れないことを望んでいます」

育隆の両親は育隆が早くに逝つてしま

つたことを彼女に詫びたことがある。「姑は私の母に会つて、もし、私に新しい相手ができた時は、娘を嫁がせるようにして祝福します、と言いました。そして、相手がいない間は、一人で外に住まわせるのも忍び難く、私が彼らと一緒に住み、互いに世話し合うことを希望していました」

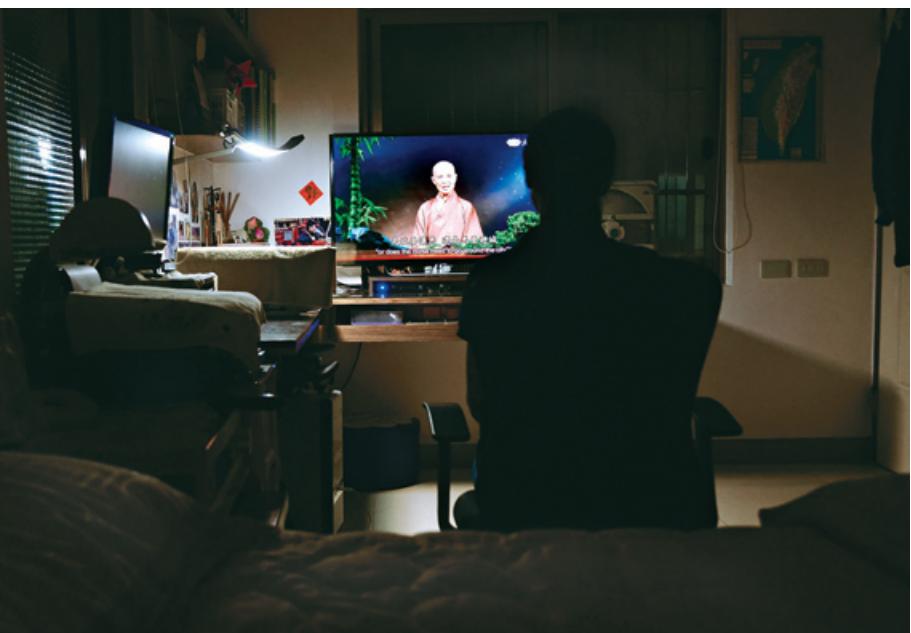
まだ心の傷が癒えない彼女は結婚相手を捜す気は全くなかつたが、夫の両親は善良で広い心で彼女の心に温かさをもたらした。

夫の家族との関係は親密で、彼女は皆がそれぞれ自分なりの方法で悲しみに立

ち向かつているのを見てきた。舅は言葉数が少なく、感情を表に表さない。滅多に育隆とそれに関係したことを話題にすることはなかつた。また、姑の方は時折、過去の話に及ぶと一人で涙を流したり笑つたりしていた。そして、育隆の弟や妹は心怡に手紙を書いたり、話してくれたり、家庭での些細なことを知らせてくれた。

実家の両親は娘婿のことを残念がつた。

●傅心怡が夫を亡くし、最も悲しみに暮れた時期以前から聞いていた上人の智慧の開示が彼女の大きな精神的な支えとなつた。仏法を聞き続け、悲しみに浸つていてはいけない、と彼女は自分に言い聞かせている。



●傅心怡は以前、どういう表情で心配してくれている友人たちと向き合つたらいいのか分からず、マスクをして人前に出ていた。今、心境も生活も徐々に日常的なものに戻る中、笑顔を取り戻して懸命に人生を生きようと思っている。

が、それ以上に娘のことが心配で、母親はよく台北まで出て来た。「母も悲しんでいるのに、私の付き添いに来るので、私は余計に心苦しくなり、自分は親不孝だと思つたりしてさいなまれるのです」

告別式が終わった翌日、毎日一人で出勤、退勤するのだと気づき、悲しみと恐怖で自転車に乗りながら涙を流した傅心怡だったが、やがて少しずつ普通の生活

を取り戻して行つた。心の傷は次第に癒えてきたとは言うものの、時には情景に伴つて悲しみを呼び戻し、泣いたり笑つたりする。しかし、そうやって心の鬱憤を晴らした後は頑張つて生きていくれる。

「育隆の人や動物に対する愛と思いやりは生まれつきのものです。とても優しく丁寧なので、私にたくさんの感動を与えると共に、とても勉強になりました。『法の香りに浸る』活動によつて、ある程度まで修行できれば私も小愛から抜け出して心を広く持つことができるかも知れません」。彼女はいつかそういう日が来るのを期待している。

一人旅

時々、急に二人の結婚記念日や彼の命日のような大切な日を忘れてしまうのです。それは何かセキュリティーシステムのように感じられ、突然、何もかもなくなってしまいます、別の日にまた思い出すのです。それに対して罪悪感の類いは感じません。心の奥底では彼をとても愛していて、全て覚えていることを知っているからです。



別れを告げられなかつたのが心残り

◎整理・黄秀花／訳・済運



(撮影・于劍興)

普安法師

大林慈済病院心蓮病棟（緩和ケア病棟）の臨床教師。経歴八年。蓮花基金会臨床宗教師養成講座修業、南華大学生死学研究所卒業、学理と臨床を兼任。

法師は長年、臨終ケアに携わり、患者や遺族、医療人員をサポートしてきた。病床での付き添いや個別案件に関する相談、グループ研究のほか、自宅で臨終を迎える人を家庭訪問して、心身の安定に協力している。また、患者の人生が終わりに近づいた時には、心の面で落ち着かせ、家族を「四道人生」に導き、患者が亡くなった後は遺族の心のケアを続けている。

誰も未来を予知することはできない

Q：突然肉親を亡くすことは、最も悲し

く受け入れ難いことなのです。遺族は現実を受け入れられず、同時に自責の念に駆られます。そういう時、どう慰め、付き添つてあげたらいいのでしょうか？

答 別れを告げる前に肉親が亡くなつた場合、短期間に落ち着かせるのはとても難しいことです。このような急激な変化によつて情緒不安定に陥り、諸々の症状が現れます。精神的に極限状態になつたり、苦しみや絶望で泣き

崩れたり大声で叫びますが、そういう感情の発散はあつてしかるべきで、制止する必要はありません。

十数年前、友人の息子が自転車で外出した時、交通事故に遭つて亡くなりました。その子はまだ二十歳余りで青春の真っ盛りだったので、彼女には受け入れ難いことでした。「息子はあんなにも善良だったのにどうしてこんなことになつてしまつたのですか？」と問い合わせました。彼女の疑問に対しても私は答を持つていませんでした。この世の縁はどういう関係にあるのか、私たちはそれを知ることはできません。しかし、事が起きてしまつた

以上、どうすれば一番良いかを考えるべきなのです。

彼女は仏教徒であり、いつも息子のために読經しています。《藥師經》の「九大横死」まで読んだ時、彼女は涙が止まりませんでした。「息子は經文に書いてある

ように、前世で悪いことをして、今世でその報いを受けたのでしょうか？」

私は彼女が言う過去生のことについては答えられませんでしたが、「死」に関する話に切り替えました。「穏やかな環境の中で、親しい人たちに見守られながら安らかに往生する、というのが世俗の人が求める『善終』です。しかし、どれだけ

人がこのような終わり方ができるでしょうか？　とくに今の世の中のように戦災や人災が頻発する中、いつ何時、無常が自分の身に降りかかるか誰にも分りません」

それでも彼女は問い合わせました。

「もし、あの日、息子を外出させず、引き止め

ていたら、あの事故に遭うことはなかつたのではないか？」事故で肉親を亡くした人はよくそれを自分の過ちで起きたものだと思い込みます。それは自責の念という処罰です。誰も未来を予知することはできず、それを防ぐ方法はありません。仏教の理論によれば、それは業

の力に引っぱられたものであり、私たちは業の輪廻の中で、それを予知したり逆行させたりすることはできません。しかし、遺族には後悔と自責の念が永久に心に宿り、ふり払うこと

ができない

のです。

実は誰でも死ぬのです。ただ死に方は様々で、事故で死ぬのはそ

の中の一つです。大事なのはどうやって死ぬかではなく、それが生命の必然的な結果である故、その過程が大切なことです。私はそのお母さんと息子さんの過去を回顧しました。「息子は物分かりが良く、親孝行で愛情深い子でした。私たちと一緒にお経を上げに行ったり、熱心に公益活動に参加していました。大林慈済病院が建設された時、そこでレンガを敷くボランティアをしました」と彼女が語ってくれました。息子さんがどんなに優しくて、人を善意に解釈していたかなど、細々した事を語っている時、彼女は満面誇らしそうでした。



「そうです。それほど善良であるのに、別れも告げずに去ってしまうには原因があるはずです」と言つて私はお母さんを慰めました。「息子さんの人生は円満に終わり、縁は尽きたのです。その後は次の縁に向つて行かなければなりません。彼を祝福して送つてあげましよう。人がいなくなつたといつて、金輪際縁が切れたわけではありません。彼は違つた形であなたの心の中に生きているのです」

その息子さんがこの世を去つたことは、私にとつても残念なことで、それが契機となつて私は臨終ケアをするようになりました。今でも大林病院へ車で行く時、

地面に敷かれたレンガの音を聞くと、そのままの子の面影が脳裏に浮かんできます。それを思うと、私はある種の感動を覚えます。彼の人生は短くても素晴らしいものであり、価値のある人生でした。少なくとも彼は私に影響を与えてくれました。

問：どうやつて遺族の突然の悲しみに付き添つたらいいのでしょうか？

答

突然の悲しみに襲われた時は、体にも異常が出ます。急激なストレスや頭痛、呼吸困難、不眠、食欲減退、過呼吸などです。また、精神的にも

無関心、憂い、誰も助けてあげられないやるせなさ、焦り、恐怖心、人生の目標に対する喪失感なども起きます。もし、ショックが大き過ぎた場合は心身のバランスが崩れま

ほか、社会道徳の規範を強要しないのも、遺族を比較的容易に現実を認めさせ、自然治癒に向かわせることがあります。

極度の悲しみに沈んでいる人に対しては、よく「演劇」瞑想法が臨床では用いられます。本人と亡くなつた人に対話をしてもらうという方法です。リラックスした状態で瞑想に入り、亡くなつた肉親を脳裏に再現させてから、遺族に話せなかつたことや感情を徹底的に出してもらうことで、わだかまりを解いてもらうと共に心を解き放してもらうのです。そういう場を設けることで遺族に現実を直視してもらうのですが、こうすれば大概は



悲しみを祝福に変えることが可能です。

例え、「どうして死んだのが私の息子なんだ！」と遺族が大声で怒りをぶつけている時、私は「彼も望んでなかつたと思います。しかし、誰にもどうするともできないのです」と言つてあげます。

それでも続けて、「私は一生善行してきたのに、どうして息子がこんな目に遭わなければならぬのか？」と泣き叫ぶ時は、決して「因果関係」を説明してはなりません。そんなことをすれば、悲しみは倍増するだけです。私は逆に「この世は辛いことだらけです。息子さんは何かの縁でお返しをするためにだけ、この世に来

たのかもしれません。それが済んだからには、これ以上辛い思いをする必要はないのです」と諭します。

それでも遺族の感情が激高して収まらないようであれば、無理してそれを止めはいけません。泣き疲れるまで大声で泣かせておき、途中で適切な時に慰めればいいのです。思いのたけをはいて疲れ切った時は、逆にさっぱりした気分になつているはずです。そもそもなければ、圧力釜のようにいつ爆発するか分かりません。

何回も情緒を発散させることで、亡き者の過去を回顧したり整理をすることができる、心は次第に落ち着いてきます。日

が経つにつれ悲しみは和らぎ、ついには新たな気持ちで元の生活に戻ることができるでしよう。

問：肉親が往生した時、涙を遺体に垂らすとこの世から離れられないと言われますが、そういうことがあるのでしょうか？

お互いの関係が深く、互いに頼り合つていたなら、泣くなという方が無理です。

また、涙を流すというのは情が深過ぎるからだという人もいますが、そういう言い方は残酷だと思います。涙は感情の表れであり、悲しみが極限に達した時は体の方で抑制が利かなくなるものです。泣けばいいじゃないですか。過度に抑制する必要はないのです。私も故人の追悼会に参加してビデオを見たとたんこらえることができず、涙を流します。しかし、それは純粹な本性が触発された結果であると思います。患者の世話を長くしていると、自然と感情が生まれるものですが、

答

涙の問題ではなく、そういう考え方

をもたらし、あきらめきれずに離れられなくなるのです。しかし、過度の抑制は情緒のはけ口を塞いでしまいます。もし、

それが愛する肉親であればなおさらです。

患者が亡くなつた場合、家族が別れを告げる機会もない時は、強烈な悲しみに襲われるのを臨床で見てきました。その時、私は家族を故人のところに連れて行き、耳元で「愛と感謝、おわび、別れ」の言葉をささやいてあげれば、少なくとも心残りはなくなります。私も故人に代わつて家族の世話と愛に感謝します。そして、最後に宗教師として、故人がこの人生で奉仕に努めたことを肯定すると共に、価値のある人生であったと讃えます。そして、「どうらんなさい、ご家族が悲しん

りますよ。あなたがこの世を去るのを惜しんでますが、あなたの体はもう使い物になりません。彼らはあなたが素晴らしい所に行くのを望んでいます。彼らの涙は悲しみだけでなく、あなたを祝福し、より良い体に変えて戻つてくるのを願う涙でもあるのです」と慰めてあげます。

いずれにせよ生者と死者の双方が安らぎ、各自の道を歩むことを望むものです。その過程で、涙は極自然な感情の表れであり、それをあえて抑制する必要はありません。それよりも祝福する気持ちで悲しみを和らげ、それを前向きの力に変えることです。

問：時間の経過と共に悲しみが薄らぐと思いますが、反面、愛する肉親を忘れていくようで、自分が怖いのです。どうしたらいいでしょうか？

答 悲しみを抑える究極の目標は、故人との関係を絶つのではなく、情のある人生で故人のために適切な安置の場所を探してあげることを少しづつ分かってもらうことです。それ故、断られた状態から新たな関係を見つけ、心を調整すると共に気持ちを転換させれば、生きていく力が湧いて来るでしょう。

大林病院のあるボランティアの方は娘

さんを亡くした後、しばらく元気がなく、生きていても面白くない様子でした。しかし、やがて彼女は野菜の栽培を学び、苗がすくすく育つのを見て、命の不思議さを理解しました。私たちも彼女が農作業することで、体力を使うと共に気晴らしにもなるので喜びました。時々、彼女に「お婆ちゃん、ヘチマは大きくなりましたが？」と聞き、何日かしてまた「お婆ちゃん、サツマイモの葉を食べたいよ」と話しかけてあげます。大勢の人の励ましで彼女は野菜の栽培に熱が入り、人生の楽しさを見つけたようです。

和ケア病棟)でボランティアをしてくれる人もいます。それは他人の役に立つこととで生きて行く力を見つけることができるので、遺族の息づかいを感じ取ることができ、そうやって心の繋がりが生まれる

のです。それは目に見える互いの拠り所ではなく、心と心の堅い絆なのです。彼らが小愛を大愛に変えることができれば、それは遺族を支えていく過程で、新たに自分の価値を見つけることになります。それは決して自分が愛した人を忘れることがではなく、愛の循環によって自分も他人も利することになるのです。

答

人が肉親のために悲しむのは、二度とその人に会えなくなり、

声も聞けなくなるからです。こういう形で断たられるのは堪え難く、悲痛です。

臨床ではよく「天人永隔」を「引っ越し」に例えます。そして、「家」という概念を説明し、亡き者が別の家に戻つて行つたことを遺族に分かってもらうので

問：「天人永隔」という言葉は、関係が絶たることで、とても受け入れられません。もし、私や家族がそのような悲しみに遭遇しているとしたら、どうすればその心を慰めることができるでしょうか？

す。あなたたちが百歳にでもなれば、やはりその家に帰り、そこで皆が集まることができるのです。こういう説得の仕方は

一部のお年

寄りには非常に有効です。他の方法では、「仏様の側」に行くとも例えることができます。

突然亡くなつた人の場合は、彼が行つた布施や念佛、斎戒などの善行、全てが重要な效能を發揮していることを信じなさいと遺族に言つてあげます。このよう

な信心があつて初めて遺族に生きる力が生まれるので。さもなければ、後悔と自責の念に駆られて生きていくことになります。

気持ちの持ち様はとても重要なことだとはより受け入れられや



を正面から受け止めることができれば、彼も安らかになると共に自分自身にも前向きの力をもたらし、前進することができるのです。もちろん、それだけで悲しみを止めることができるわけではありませんが、考え方を転換して、これから前向きに生きて行くことを自分に言い聞かせれば、故人も思い残すことはなくなるでしょう。

どちらかと言えば、マイナス思考の人が多いことが心配です。少しでも早く理解させることができれば、療法の効果は表れやすいのです。遺族と何度も話し合って心のうちの感情を理解し、会話の中

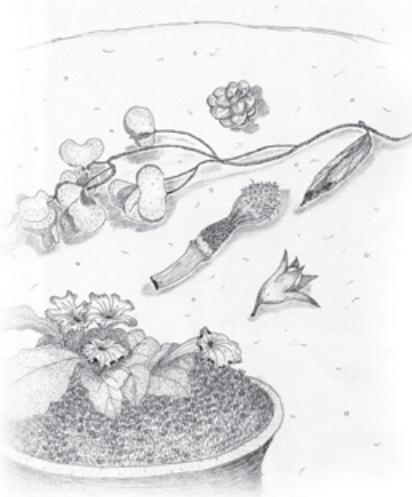
で新たな考え方ができるようになれば、感情の起伏は次第に落ち着き、自然と前向きになるでしょう。

ターミナルケアと遺族の世話をして長いのですが、四つの言葉がどんなに大事なことか分かりました。しかし、人によってはその「愛、感謝、おわび、別れ」の言葉を告げる機会がなく、亡くなつてしまつた後では無駄だと遺族は思うかもしれません。亡くなつた者には分からぬと思うからです。

この問題はよく考えるに値します。往生した後、本当に繋がりは切れたのでしょうか？ 私はそうは思いません。私は

さまざまな観点から研究し、数多くの読書会を主催したり、悲しみにより添うことをテーマにした書籍を共同研究して来ましたが、心の持ち様を変え、わだかまりを解けば、彼らに生と死の問題を違った観点から見てもらうことができるのです。

生と死の問題は永遠の研究テーマであり、生があれば死があり、死があれば生があるわけで、その縁は続くのです。しかし、人が死ぬと四大元素は崩れます、意識も崩壊するのでしょうか？ 私はそういう思いません。仏陀の教えである「因果の循環」という道理を信じるべきです。木



の葉のように枯れて散った後、それが花のために土を肥やし、冬が去つて春が来れば、新芽が出て息づいていくのです。

障害者の口の健康を守る（上）

◎文・陳歆怡
撮影・楊子磊
訳・黒川由希

林鴻津

障害者の歯の診察には忍耐と愛が必要だ。歯科医の林鴻津はしかし、それが自分の当然の職務であると考えている。彼は第一線の介護スタッフと協力し、口腔衛生教育を普及させるとともに、愛の作用を広めるため、行政まで動かした。



毎週火曜日の午前中、白髪頭に明るい笑顔を浮かべた林鴻津が、三重区の自宅から車で四十分かけて遠路はるばる淡水の観音山のふもとにある八里愛心教養院（障害者福祉センター）までやつて来る。

そしてこここの入所者と「親密なデート」

をする。「最近お菓子をよく食ってるでし

よ？歯茎が少し腫れてるからお菓子は

ちよつと控えないといけないよ。まず歯

を洗って、それから空気洗浄をするよ。そ

の時ちよつと痛むかもしれないけど、我

慢してね」。重度の脳性麻痺を患い、肢体

が不自由な盟盟は、介護スタッフに抱え

られ、車椅子から診療用椅子に移った。

その手足は固定ベルトで固定されていたが、聞きなじんだ林医師の親しげな声を聞くと大きな声で「はい」と言い、自分から進んで口を開けた。

甲高い機械音が止んだ後、盟盟が緊張で硬くなっていることに気づいた林鴻津は、こう声をかけた。「よく頑張ったね！」

唾は飲み込んでもいいよ。リラックスす

して」。

診察の際、林鴻津はいつもゆつたりと入所者とおしゃべりをしながら、歯石の除去や歯の洗浄を行う。林医師は十一年間彼らに寄り添い続けてきた。診療が何事もなく順調に進むのもそのためだ。

十一年前、初めて八里教養院を訪れた時、入所児童たちが大切に介護されていることを感じはしたもの、室内には異

●林鴻津医師は八里愛心教養院で、歯磨きの仕方を障害者に教えている。

臭が漂っていたことを林鴻津は覚えている。「先生やボランティアたちは慣れてしまつて気づいていませんでしたが、それは歯科医だけに分かる歯周病の臭いでした」。そこで林医師は十数名の歯科医を動員して入所者全員の検査を行い、さらに日常の歯磨きを徹底してこそ問題を解決できると教養院にアドバイスした。

八里教養院保健チームのリーダー陳麗雲は、歯磨き運動開始の当初は、天地がひっくり返るような革命だったと振り返る。「歯周病が重症化していましたから、ちよつと磨くだけで口の中は血だらけ、全身を縛つた上、何人かのスタッフが一



緒になつて押さえつけてようやく歯磨きができるという入所者もいました。磨かれる子は泣き叫び、外部の人からは私たちが児童虐待していると思われてしましました」。

しかし林鴻津の辛抱強い指導と八里教

養院スタッフ全員の頑張りで、現在、入所する子供たちは喜んで歯磨きをしてもらつており、中には自分で歯ブラシやデンタルフロスを使える子までいる。「口の中は一般の人より健康ですよ!」。林鴻津は自分の子供を褒めるような、得意気な口ぶりで話す。

同じ週の土曜日、林鴻津はいつものよう中和区にある双和病院の特殊歯科診療センターに駆けつけ、やや年長の患者の診療に当たる。

三十七歳の重度自閉症患者の黄宝貴（仮名）は、三ヶ月ごとに両親に連れられて林鴻津のもとを診療に訪れる。黄宝貴の父親の黄慶祥は、「息子は病院へ向かう車の中で、行き先に気づくと泣き叫んで暴れ出します。診察室に着けば妻と二人でなだめすかすかたわら、三名の医療スタッフにも加わってもらつて、何とか宝

貴を押さえつけて診療用椅子に座らせるんです」と話す。

「宝貴は言葉で人とコミュニケーションを取ることができません。緊張して興奮しやすく、暴れて周囲の人を押し倒してしまう可能性もあります。でも、もし固定ベルトで縛つてしまえば、もっと激しく興奮してしまいます」。診察のたびに大勢のスタッフが大わらわとなるが、この病院のスタッフはいつも忍耐と同情心をもつて接してくれる所以安心でき、本当にありがとうございました」と黄慶祥は言う。彼は双和病院で初めて林医師の診察に当たった時のこと覚えていて、「前の病院では

内政部の統計によると、台湾全国の障害者の数は約百十四万人、総人口に占める割合は四・八八%。国民健康局の

身障者の介護者へのサポート

慈濟ものがたり

二〇〇五年の全国調査によると、台湾の障害者の齲歯罹患率は九一%に達し、一般市民の六九%を大きく上回る。一方、台湾の障害者の齲歯治療率をみるとわずか三一%にとどまり、一般市民の七四%を大きく下回る。障害者の口腔の健康問題がいかに重大かが見て取れる。

日ごろから口腔保健を根付かせることは、障害者にとって、虫歯や歯周病を予防できるだけでなく、細菌やウイルスの発

●診察の際、兵役として勤務する青年が、興奮しあく行動の不自由な入所者を抱えて診療用椅子に移す。



●毎食後、介護スタッフが優しく入所者の歯を磨く（左）。歯磨き運動を推進している時、脳性麻痺の入所者も一生懸命足で歯を磨く練習をした（下）。



生を防ぎ、気道感染のリスクを低下させられること、知覚過敏や感覚異常を減らすことができること、口臭を解消し自信をつけることで人間関係を改善できること、歯磨きを習慣化することで、障害者に口を開けることに慣れてもらい、歯科に対する恐怖感と嫌悪感を軽減できること、といった多くのメリットがある。また障害者が自分で歯磨きをする訓練をすれば、細かい手作業の訓練、手と目の協調能力の訓練にもなる。

歯磨きをしたり、歯科で診療を受けたりすることは、一般人にとつては何でもないことかもしれないが、障害者にとつ

ては一大難事である。と言うのも、身体障害者は身体が思うように動かず、介護者も歯を清潔に保つことの重要性の認識に欠けている場合が多いからだ。また手足が突っ張ったり、認知・表現能力に障害があることもあり、口を開けて敏感な口の中を歯磨きしたり、歯の診察をしたリするのが難しいのだ。

さらに残念なのは、台湾には多くの歯科診療所があるが、多くの歯科医が面倒くさがつたり、あるいはまた患者から囁きられるのではないかと恐れたりするため、障害者の治療を拒否することだ。このことが障害者から治療の機会を奪つて

いる。

十一年前、林鴻津が八里教養院と良縁を結んだことは、障害者の歯の健康にとって画期的な一步となつた。衛生署国健

局（現在の衛福部国健署）は二〇〇六年

林鴻津のスケジュール帳をめくると、毎週火曜日の午前中に八里愛心教養院に出張診察に行き、隔週の土曜日の午前中には双和病院特殊歯科で診察を行う以外に、週末には各地の病院やケア施設で講演やトレーニング指導を行つており、予定は二ヶ月先までいっぱいだ。唯一リラクスできる時間は毎週木曜日の午前中で、「ちょっと一眠りもできるし、外をブ

熱血歯科医が天地を駆ける

から八里教養院の成功の経験をモデルケースに指定し、歯科医師公会全国連合会に委託して台湾全国で身障者口腔予防保健サービス計画をスタートさせた。二〇〇八年、行政院衛生署は双和病院に委託して、全国初の障害者専用の口腔ケアセンターを発足させるとともに、台湾全国で六カ所の特殊歯科医療モデルセンターも次々に設立し、多くの障害者に利

ラブラすることもできます。数年前の検査で高血圧が分かり、今でも時々病院に行かなくてはなりません」と言う。こうした忙しい日々を、林鴻津は少しも苦にすることはない。「個人の診療所を開業したのは、ただ生計の道を立てるため、目標はあくまで障害者口腔ケアの理想を実践することです。それにずっと診療所にいても面白くありませんからね。八里や双和に出張診察に行くのは、私にとってレジマーのようなものですよ。」

一九五五年生まれの林鴻津は若い時から熱血精神に溢れていた。台北医学大学歯学部一年生の時、学内のボランティア

サークル「楽幼社」に加わり、社会奉仕の種が植えられた。大学四年になると同級生と「台北医学大学学生口腔医療サービス隊」を結成し、平渓、鼻頭角などの遠隔地の農村で口腔衛生教育宣伝を行った。しかし経験不足で大したことはできず、将来開業し、実力をつけた後、きっとまたここに戻ってきて専門的医療サービスを提供しようと仲間たちと誓い合つた。

しかし卒業すると、みな仕事や家庭のこと忙しく、一九九〇年、三十五歳になつた林鴻津はようやく台北医学大学の同級生、蕭於仁医師の呼びかけに応じて、

もう一人の同級生、黃淳豐医師とともに「415口腔医療サービス団」を結成、毎月一度辺境の農村へ行つてサービスを提供した。これは台湾初の歯科医療と衛生教育を結合させたボランティアモデルとなつた。林鴻津はまた慈濟基金会に協力して医療団、人医会を発足させ、各種口腔医療ボランティア活動に参加、活動の範囲は海外にまで及んだ。

「歯科とその他の科の違うところは、歯



●林鴻津は以前口腔医療サービス隊を組織し、キリスト教など医療資源の乏しかった国へ行き、診療ボランティアを行つた。（写真・林鴻津）

科の診察には大型の歯科治療専用の椅子が必要で、どこへでも簡単に持つていい物ではないところです。私たちは当時自己流で軽便で持ち運び可能な設備を開発しました。しかし現場ではやはり野戦病院のように、臨機応変の処置が必要でしたけれどね」と林鴻津は話す。

一九九〇年代半ば以降、台湾の健康保険制度と医療ネットワークは徐々に完備されていき、僻地で診療ボランティアを行う必要はなくなつていった。しかし庶民の生活に密接に接したことで、口腔衛生教育は絶対に医療より優先されなければならぬという認識を林鴻津は持つ

た。「どんなにたくさんの人力、資源を投入しても、虫歯をすべて治療することはできません。子供たちに小さい頃から口腔保健の習慣を身につけてもらうことこそ最も効果的で長続きする治療法なのです」。

林鴻津と兄弟のように親しい黃淳豊医師は、医療サービスの原動力をこのように述べる。「毎回の医療サービスで、ただ一人の子供が笑顔になつてみせてくれれば、それだけで十分なんです。何の変哲もないと思われるかもしれませんのが、しかしとても心満たされるのです」。

(つづく)

■ 静思語

【一粒の米がザル一つ分となる】

—— 粒一粒米を集めれば積もりつもつてザル一つ分となる。小さな一粒だからと軽んじて漏らしてしまつたら、どうしてザル一つ分の米となり得よう。





【特別報道】

世界で永遠に 戦禍がないように

内戦で二百万以上のシリア難民が戦禍を逃れてトルコに避難した。

学齢期の子供は五十万人いるが、そのうち学校に通えるのは十四万だけである。

祖国を失った彼らが、未来をも失うことはあってはならない。

トルコに 安住を得て

◎文・蕭芬芳／訳・慈願

トルコとシリアの子供たちの心に善の種子を植えよう。

将来、彼らが成長した暁に、言葉や文化の違いを超えて、愛と善で対立をなくし、その循環が永遠に続くために。



●トルコ人の子供たちが学校へ行って、シリア難民の子供たちに送るおもちゃを整理するのをサポートする。自分の幸せを人にも分けるよう願う。

二〇一一年三月、シリアで内戦が勃発して以来今日に至ってもまだ平和が訪れる兆しは見えない。千日以上も難民は战火を逃れるため、様々な手段を使って近隣国への避難を試みている。平和な世界にいる私たちは、戦争がいかに残酷なものか想像するのは難しい。

テレビの前に座ってこのニュースを見ていた私は、彼らのために何かしてやりたいと思う一方、何もできない無力感に襲われ、ただ彼らが無事にヨーロッパに逃れられるように祈っていた。

台湾から十三時間のフライトを経て、私たちちは十七日の早朝五時にイスタンブール空港に到着した。空港からメナハイ小中学校へ直行し、時差もすっかり忘れ、配付の準備に没頭した。私たちが到着する前に配付活動の段取りをすべてしてくれた胡光中、余自成、周如意各氏の慈濟

昨年の十月十六日から二十三日にかけて私の生活に変化が起きた。^{アラビア語}慈濟シリア

ボランティアに感謝した。彼らは長年にわたってトルコで奉仕している。

この度も彼らは種々の困難を乗り越えて、トルコのサルタンガジ市長と教育局长に学校の教室を提供してくれるようお願いしてくれた。シリアの臨時教職員が作成した授業計画を難民の子供たちに行い、台湾慈済基金会が学資援助を提供することになっている。トルコ人、シリア人、台湾人の間のイスラム教と仏教の壁のない誠心誠意の交流は、身内のように親しかった。

この度の難民配付は三つに分かれている。

長に学校の教室を提供してくれるようお願いしてくれた。シリアの臨時教職員が作成した授業計画を難民の子供たちに行い、台湾慈済基金会が学資援助を提供することになっている。トルコ人、シリア人、台湾人の間のイスラム教と仏教の壁のない誠心誠意の交流は、身内のように親しかった。

この度の難民配付は三つに分かれている。

一、メナハイ小中学校の児童にクレヨン、鉛筆、ボールペン、鉛筆箱とクラスごとにボール、積み木、フリスビーを配付する。

二、千五百世帯のシリア難民に米、砂糖、食用油など十六種類の生活物資と現金カードを配付する。

三、百五十二人の難民児童に家庭生活補助金を配付し、工場で働いていた賃金の肩代わりをし、子供たちを学校に戻らせた。これは前例のないことで、シリア人の父母は信じられず、やつと探し当てる仕事をやめるわけにはいかないと考えていた。学校を見にきて実際に目で確か

めた後、補助金を申請した。

バイト児童の生活補助金配付の会場では、八歳から十四歳の児童や父母たちが壇上に上がって喜びを述べていた。

「私は一日十二時間の仕事をしていました。朝の八時から夜の八時まで働きづめで、トイレに行く時間はたったの十三分。動作がおそいと叱られたり殴られました。今は慈済からバイトの代わりの補助金を頂いて仕事をせずに勉強ができるます。ありがとうございます慈済、ありがとうございます台湾」

「私は家にお金がなく、家庭を助けなくてはならなかつたので学校に行かれず、とても悲しかつた。これからこの貴重な

機会を大切にして一生懸命勉強して成績で一番を取ります」

「私の娘は学校へ行きたかったが、家のため仕事をしなければなりませんでした。以前の学校では成績が良かつたのですが。今は慈済から八百リラ（約三万一千円）の助学金を頂き、勉強を続けることができます。とても慈済に感謝しています。アラーに感謝を」

「私の長男は二年半も早朝から夜遅くまで仕事を出かけて、とても心苦しかつた。今は勉強の機会を下さつてありがとうございます。この子が大きくなつたら成功して、あなたたちのように人を助け

る人になるよう願っています」

「私は妊娠して仕事を探せなかつたの
で、息子が仕事をしなければなりません
でした。でも、今息子は学校に通い、私
は安心して家にいることができます。主
アラーのご加護があなたたちに賜るよう
祈っています」

配付が終わつて家庭訪問に行つた時、
どの家庭にも言い尽くせない悲しみがあ
つた。十四歳のカサンの家に行つた時、こ
の子は私たちのためにコーヒーを入れて
くれました。母親が心配そうに父親の病
状を話しているのをそばで聞きながら、
手の指先をもんでいるのを見て、この子

もどんなにか心配しているか分かり、私
の傍へきて座るように言つて肩を抱きし
めました。お別れの時、カサンは一生懸
命勉強して、将来は技術者になつて工場
を持ち、家の大黒柱になつて温かい家庭
を築くのだと私たちに約束した。

配付をしている時、正午になると教育
局長のとりはからいで、それぞれの学校
の食堂で生徒達との交流があつた。局長
は私たちを、台湾からきたボランティア
団体だと紹介し、続いて「慈済の竹筒歳
月の記録」と難民をレポートした「星空
の下に愛」というドキュメンタリーが放
映された。

教育局長はこの機会にトルコの学生た
ちに愛の心を啓発し、彼らがシリアの児
童に対して何ができるかと聞いた。学生
たちは活発に手を挙げて、着られなくな
った

つた服をあげる、勉強を教える、おもち
やをあげる、彼らを愛する、などの発言
が飛び出し、子供たちに愛といったわりの
気持ちがあることが窺われた。

●慈済ボランティアがメナハイ学校のカサンとい
う学生の家庭を訪問した。母親と一緒に病気の父
を世話していることを聞き、ボランティアが抱擁
して励ます。(撮影／李美儒)

何年か後トルコの子供が成長し、シリ
アの子供も成長した後、言葉や文化の違
いによる対立は解かれ、互いに排斥し合
う状況はなくなるだろうか？　早くから
子供たちの心に愛と善の種をまき、健や
かに芽生えることができれば、愛と善が
お互いの仇や恨みをなくし、愛と善の循
環は永遠に続くだろう。シリア難民が
日々安らかになり、トルコで安住を得て
一家團欒の幸福に浴するよう祈る。



この世には まだ善も美もある

◎文・顧佩珍／訳・慈願

子供たちは難を逃れる途中でさまざまなことに遭遇する
だが、この世には善や美なる物があることを知らせたい
周りの友や見知らぬ人に対しても善意を持つように願う。



シリアの内戦によって数百万人が、行き場もなく彷徨つてることが世間の人々の注目するところとなり、国際的な問題となっている。彼ら難民の家はいつたいいすこにあるのか？

この度の配付の中で出会ったシリアの人々の思いはみな一樣で、親として子供たちに明るい未来を築かせるため、命の危険を冒して自由に向かつて走って行つた。しかしその境遇はみな一樣に人の軒下に身を寄せることになり、生計を維持するため大人はもちろんのこと、幼い子供までが工場の日雇いをしてわずかな賃金を得るために働かねばならない。トル

コ通貨の一リラは台湾元に換算して約十一元、大人の月給は千二百リラ、子供は六百リラから八百リラでしかない。

疲労困憊のはてに家に帰つても狭い借家に大勢がぎゅうぎゅづめでろくに休むこともできない。食欲もなく、長時間心身に受けるストレスは例えようがない。

親は子供たちに良い生活を送らせたいがために故郷を離れたが、かえつて家計の負担を負わせ、勉強の機会まで失わせたことに自責の念に駆られている。しかし不幸中の幸いにも縁があつて、現地の慈済人に巡り合い、しばらくの間経済的なゆとりができる、子供たちの教育問題

も解消した。

イスラム教徒はよく「プクラ、インシャラ！」と言うが、その意味は「すべてはアラーのお導きのもとに」とある。その実この一句は仏教の「一切は良い因縁による」の意味に近い。ジュマ教授は、同じくイスラム教徒で、また慈済の門弟でもある胡光中と周如意を訪ねて、一緒にシリア難民救助の構想を打ち出した。そして、上人を尊敬しているスウタンチャチ市の教育局長は全力で支持して、現地の宗教学校が午後授業が行われていない教室をシリア難民児童のために提供するようかけあつてくれました。さらにスウ

タンチャチ市長も熱心に協力してくれたおかげで、すべてが順調にはかどった。ある学生が「私は以前に、コーランの第二章の『黄色い牛』を夢見ました。その中に遠くから愛のある人が助けに来てくれたというのがありました。その夢が今本当にかなつたのです」と話した。

一歳半の赤ん坊を抱いていた若い母親は、夫に固定収入がないので、二人の子まで職に就いて一家八人の暮らしを助けていました。「ジュマ教授から、台湾からきた慈済が、経済的な理由で学業をあきらめている子供に、月給と同じ金額の生活補助金を配付して学業を続けさせて

いるという話を聞いた時は、私たちをだましていると猜疑心でいっぱいでしたから、子供に仕事を辞めさせませんでした。しかし隣の人が本当に補助金を頂いたのですよと言つてくれました」と話す。

「私は自責の念でいっぱいでした。私は慈済を信じることができなかつたために、二人の子供の就学の機会を逃してしまいました。私はどうしてそれを償えばいいのでしょうか？」と。私たちが家庭訪問したほとんどが同じ状況だつた。

私がまだ慈済に参加していなかつた時、仕事の関係で中東諸国を回る機会が多く、トルコとイスタンブルもたびたび訪問していた。しかしこの地で善と美の因縁に出会うとは思つてもみないことだつた。上人に心から感謝し、また多くの慈済の同門たち、さらにトルコ、シリ

アの人たちが私たちと共同で、この因縁を成就させることを願つてやまない。彼らに、世界にはまだ多くの善なる物、

【證嚴法師のお諭し】

◎訳・慈願／絵・林淑女

地球温暖化が緩やかになるように
共に認識を深め、
共に歩こう



欲念を低く抑え

生活を自然に戻し

心靈は素朴で堅実に

愛の心を高め

自分と他人をも愛し

共に大地を大切に

皆同じ知識を以て共に努力すれば
まだ地球を救うには間に合う

東アフリカ内陸にあるマラウイは、長期の旱によつて食糧難に陥つています。ニュースの画面にひび割れた広大な大地が映し出され、農夫は懸命に土を掘り起こしていますが、乾ききつた土に種まきはできず、さらにどんなに苦労して耕したからといつても作物はできないでしよう。長年にわたる食糧難で現地の人口の半数が飢餓状態に陥つており、現在少なくとも二百万人が食糧援助を必要としています。

南米パラグワイのアスンシオンの熱帯雨林は、史上稀にみる豪雨で数万人が避難を余儀なくされています。新疆ウイ

グルは雪や氷に閉ざされて、米国のワシントン州でも豪雨によって洪水や土石流が発生しています。

同じ地球上にありながら、ある地域では旱による食糧難、ある地域では豪雨による災害が起っています。これらはみな気候が極端に不均衡に陥っていることによるものです。その上、気候変遷の根源は地球温暖化にあります。

地球温暖化による災難はますます頻繁に起り、旱、洪水、暴風雨は人類に生命財産の損失をもたらし穀物の生産にも影響しています。工場開発とともに

う土壤、水源への汚染は農民の苦労にもかかわらず、収穫は食用に供することができず破棄されてしまいます。食糧の供給と生産の問題は人類の存続に重大な危機を及ぼしており、いち早く地球温暖化の対策に取り組まなければならず、各国が共に取り上げて共に認識を深めることです。

第二十一回国連気候サミットがパリで行われ、百九十九カ国あまりの代表が集まって地球温暖化を防止するため的具体的な行動について相談しました。十二日間の討論の間、経済利益と地球保護をめぐって困難な難題が起きました。

最後には、地球温暖化を摂氏二度以内に留めるとの決議をめぐって議論となり、最終的に摂氏一・五度までに下げるよう努力することを決議しました。

人々はこの問題の根源をよく知っています。それは人類が利益、享受を貪るために地球の温度が上昇し、それが極端な気象現象を引き起こすもとになつています。しかし経済利益を放棄して一酸化炭素減少に努めようと決心することはなかなか難しいものです。

地水火風の四大不調は人心の不調によります。人心の無明とは、目先の利益にとらわれているためで、濃霧に覆われ

遠方が見えないと同じことです。目先の利益ばかりを求めていると、人類の未来に危機を及ぼします。地球を救うことを行らなければ、取り返しのつかないことがあります。

全人類が共同で依存している地球を保護すれば、人類の平安は保証されます。「共に知り」「共に認識」するだけでなく「共に行動」しなければなりません。ですから省エネ、二酸化炭素減少はスローガンだけでなく、日常生活の中で実行しなければなりません。皆が物欲を抑え、愛の心を高め、共に知り共に認識して人を愛し、大地を愛してこそ、地球

の危機を取り除く妙薬となるのです。

●

「気候変動に関する国連枠組条約」執行秘書のフィカロス女史は、身を以て範を示しています。彼女は素食は二酸化炭素減少に役立つと理解して、二年前から実施し、普段は歩くか、自転車やバスなどの交通機関を使って二酸化炭素減少に努めています。

素食は満腹感を感じ栄養に足る上、さらに動物の命を犠牲にしません。口欲は舌先の何秒かの快感でしかなく、業者に

大量的動物を飼育させ、大量に出される排泄物は温室効果ガスを排出します。観念を変えることで、皆は素食で地球を守ることができます。人類が大地を大切にすれば、大地は人類が必要とする安心無事を供給してくれるのです。互いに感謝すれば善の循環になります。

物欲を少しでも少なく抑え、生活を自然に戻して素朴になると、地球温暖化を防止する助けになります。これは人々の責任であり、また使命でもあります。自分のためだけでなく、子々孫々にわたり健康な地球を残してあげましょう。

たつた一つの命も見捨てず
永遠にこの信念を堅持する

医師たちは素早く露出している腸などの腹部を洗浄し、生理食塩水だけでも六十三ガロン、二万CCCの輸血で地獄の門から彼を救いました。

十一月十八日に、林傳欽が台北關渡志業道場へ私に会いにきました。当時十四歳だった台湾原住民、ブヌン族の少年は瞬く間に四十二歳になっていたのです。

二十八年前のことを思い出すと、その頃は花蓮慈濟病院^{ツイチ}が開業一年を過ぎたばかりのことでした。車の修理工場で働いていた彼は大きな大理石に圧し潰され、救急室に運ばれて来た時は、下半身はめちやめちやに碎け、露出している腸や胃のところに砂がついて、そ

のすさまじさに私の胸は激しく動悸を打ち、目を覆いました。
医療スタッフはまだ十四歳の未来を考慮してなんとか足を切らないようにと手段を模索しました。しかし下半身の大動脈と大静脈は完全に切れており、傷口に感染して壊死すると敗血症を起こし命取りになりかねません。最後に両足を切断して上半身だけになりました。次いで泌尿器系統の再構築と植皮など

は、医療スタッフと林傳欽の長期にわたる試練でした。生命力は実に不思議なものでです。整形外科、骨科、内科、栄養科などの医療スタッフはあきらめずに一度また一度と危険な状態から救い出し、彼もそれに応えていました。

空中に吊り下げての治療が数ヵ月経つた後、やっと平らに下ろしましたが、座骨がないのでどうやって座らせるのか問題でした。整形外科主任の陳英和医師が思いついたことは、ふくらませた風船を桶に入れて座らせるのことでした。陳

医師は一人で徹夜して、百個以上の風船をふくらまし、大きなビニール袋に入れ持しています。

当時、彼の主治医だった整形外科主任陳英和医師は、花蓮慈済病院がオープンする以前に花蓮へきて病院の整備をしてくれていました。後に院長になり、今では名譽院長です。その高名な技術を学ぼうと、最近アモイから楊曉東と陳団治二人の患者がきました。

硬直性脊髄炎を患っている楊曉東は、十二歳に発病してから家にひきこもつ

て固定してから樽に入れ、彼を抱き上げて、風船の上に座らせる訓練を始めました。

医療スタッフばかりでなくボランティアもケアに参加して、一年半の治療とリハビリを経て傷が安定すると退院しました。水泳の選手だった彼は退院後も練習に参加して、障害者水泳競技で金メダルを獲得し、世界大会とアジア大会にも参加して、それぞれ金メダルを獲得し、精舎へ来て私たちに見せてくれました。

こんなに重大な傷を受けて障害者になつても、彼は堂々と生きのびて結婚

て十九年間、全身が二百度に湾曲し、顔がほとんど膝にくつづいていました。そしてアモイからはるばる花蓮へきて陳英和医師の診察を受け、五回の手術を受けた結果、頭を上げ胸を張つて歩けるようになつていました。

二十六歳の陳団治は「先天性両膝反弯曲」で、楊曉東の手術の成功をニュースで聞いて花蓮の病院にきました。以前は足を曲げた状態で歩いていたのが、陳医師の七回の手術で足裏を地につけて歩けるようになりました。今ではバスに乗つて、現地のボランティアたちと貧困家庭の訪問ケアを行っています。「どんな

命も見放さない」。これは慈濟の医療志

業が幕を切った時から今まで、三十年近く持ち続けている不変の決意です。慈濟の医療はまた「慈善医療」と言えます。医療スタッフ以外にボランティアが患者だけでなく家族の心にも寄り添つて温かく世話をしています。

心を一つに穩やかに
互いに愛し協力すれば
時が累積され
愛の力になる

ふり返つてみると、五十年近い慈濟の

道は一步一歩が険しいものでした。しかし今では五十カ国以上に根を下ろし、撒いた愛の種は芽を出し苗から大樹に成長して、苦難の人を陰ながら見守るばかりでなく、近隣諸国の救助もしています。

アフリカ本土のボランティアは、生活は貧しくとも心は豊かです。彼らは慈濟が早期、「竹筒歳月」の艱苦の時代精神だった、毎日五毛錢を貯金して人助けする方法を用いていますが、五毛錢を出すことができなくとも、日々善の心で福田を耕し、あらゆる所で愛の奉仕をしています。

とができます。彼らの貧しい生活、劣悪な環境、慈濟人との言語の隔たりなどを忍んで、努力して法を伝えていることに感動しました。

この度、三人のインド系マレーシア人が台湾へ認証を受けにきました。彼らの民族は厳格な規律があって、婦女子は夜間外出することができません。しかし彼らの努力で、社会のために尽くしていることを家族が理解して、支持を得ることができました。異なる国々にいる慈濟人は、肌の色、民族、国籍、宗教などは一律でなくとも、志を一つに菩薩道を歩む

近日中に二十八の国と地域から台湾へ委員の認証を受けにきます。その中にはアフリカの五カ国、南アフリカ、スワジランド、シンバブエ、レソト、モザンビーグの人々がいます。彼らは法を求めるため、はるばる千里の道を辿ってきました。修行中は一時も無駄にせずに法を吸収しています。

アフリカ菩薩たちは愛の心に満ちていればかりでなく、人文も豊富にあります。彼らは慈濟の法脈と宗門に明るく、また「仏心を師の志とする」ことも心得ているので、普段の貧民ケアでは、苦しみがなくなつた後には説法を全くすこ

人の中に入つて、真心を以て相手を尊重し協力して愛の力を發揮しています。

よいことをして

心と脳を循環させよう

善の細胞は絶えず新生する

五十年近く慈濟と共に歩いてきた多くのボランティアは、黒髪から白髪になっています。十一月初旬歳末祝賀会で屏東へ行脚した時、ボランティアたちが壇上で「經藏に入りて」の劇を演じてみせてくれました。その敬虔な一挙手一投足はさながら法会のようでした。練習に練

習を重ねて、法を心に刻み込んだ徳行が現れています。その二回の演技は忘れることができます。

屏東の劉徳妹は貧しく、夫と工事現場の仕事に就いていました。そして慈濟が花蓮で病院を建設するという話を聞いて、工事現場や市場で寄付金を募り、毎月夫婦で花蓮へきて募金で集めたお金

を納めにきていました。夫婦は、職員が帳簿に記入している間の時間を惜しんで、精舎の畠仕事を手伝っていました。

それから三十年が経ち夫婦は亡くなりましたが、その行いは模範となつて、多くの人間菩薩じんかんが受けついで、菩薩道で

精進しています。

たとえ体が老いても心は老いていません。老いても時間を無駄にせず多くのことをやればその分得ることができます。毎日起床の時に身体が健康で手足を動かすことができると、精神を奮い立たせて良いことができます。良いことをすると心と脳が循環して絶えず善の細胞を造ります。

誰も自分の生命がどれだけ長いのか知ることはできませんが、しかし生命の価値を大きく深めることができます。進んで人の中に入つて造福し、自分の慧命を増やしましょう。



平安に昨年の毎日が過ぎていったことは大変ありがたく、感謝します。これから、敬虔な心をもって、新しい一年を迎えます。皆さんが時間を把握し、また日々精進して、生命の価値を發揮されますよう願います。

中年の収穫

現在中年にさしかかった世代は、親には孝養を尽くすようにと教えられ、また、時代を切り開くために子供をしっかりと教育せよと期待されてきたので、「サンドイッチ（板挟み）世代」と言われます。この重いストレスにはどうように向き合つたらよいでしょうか？

結婚した頃はちょうど台湾の高度成長期で、国民は株投資に夢中になつていました。そして、民間が発行した六合彩や大家樂という宝くじも人気があり、誰もが一夜にして金持ちになりたいと願っていました。夫の家は三代にわたり材木屋を経営しています。木材は大きくて重く、大変な仕事なので運

転手と運送の人を見つけられないでした。でも、不動産業が繁盛したおかげで注文が絶え間なくきました。台湾南部から木材を満載したトラックが一台また一台と続いて北部へと出発しました。私たち夫婦はコマのように回り続けました。

私たちは同時に八十歳以上のお祖父ちゃんと義理の母の世話をしましたし、子供が続けて生まれて、大変忙しい毎日でしたので、ほかのことを考える余裕もありませんでした。また、実家の母がよく電話で「嫁の近くすべき本分を忘れないように」と言い聞かせてきたので、私はおとなしく嫁の責任を果たしていました。

商売がら私の動作は早くなり、せつかちですが無駄がなくさっぱりとした性格になりました。それに、義理の母は若い頃からしっかりした人だったので、私はさらに年配の人に従順に仕えることの大切さ、それから、「我慢す

る」という根気を身につけることができました。義理の母に言われば何でもやり、わけを聞かず、口実を言わず、長男の主人もそういうふうにおとなしく従います。

仕事以外に気晴らしになるような楽しみもなく、両親のために一緒に過ごしていました。二人の子は私たち夫婦の背中を見て来て、親の苦労が自然にわかるのか、小さい頃からおとなしく自己管理ができます。

睦まじいことは貴いことです。平凡で簡単な毎日を過ごすことが家庭生活を営む秘訣です。とくに慈済ボランティアになって十数年が経ち、幸いに人文真善美ボランティア（記録・執筆を担当する）部門にいるので、いつもボランティアの身の上話を書くチャンスがあるのです。平凡な専業主婦やダウン症児や左官の職人や車修理人など、大勢の人の身の上から、バラエティーに富むライフストーリーを会得しました。まるでそれぞれが一冊の経典のよ

うです。彼らは頑力で業力をなくし、度重なる現実の苦労を突破して運命に屈しませんでした。そしてさらに奉仕の中から苦しみを乗り越えてこそ幸福になれる学んだのです。彼らの話が私に頑張る力を与えてくれるよう心の中にこうした貴い人生の軌跡を銘記し、自分の人生におけるお手本としています。

昔から歩いてきた足跡を振り返ると、もし辛い試練がなければ今のように勇気を持つこともできず、これまでの努力がなければ今日の収穫はなかつたと深く感じました。五十になつて定年を迎えると、とうとう安心して生活の重心をボランティアの道に向けることができ、満ち足りた歳月に入りました。普通の生活と違うことを習い、もっと謙虚になり、ここまで歩いてきた人生は簡単に成し得たことではなかつたとよく分かりました。必ず常に足るを知り、感謝の心を持ち、何事も大切にしていきましょう。

（慈済月刊五八六期より）

私の周りで善縁の起点 を見出す」ことができた

【喜びの発見】



◎口述・郭淑菁／文・葉文鶯／訳・慈願／撮影・郭明娟

以前の私は夫と子供の世話をし、美容院を開いて家計を助けていた、そんな安らかな日々を過ごしていたが、舅が重病にかかった時、私には疑問が芽生えた。なぜ舅のような善人が病苦に苦しまねばならないのか。舅は亡くなった後、何を持って、どこへ行くのか、これらの疑問は私に別の人生の方向を示してくれた。

ある日、私は病棟のエレベーターで数人の人と乗り合わせた。その中の一人の男性が「あなたはボランティアにでもきたのかい?」と聞いてきました。まるでボランティアは手持ち無沙汰で時間つぶしにきているとでも言うような口ぶりでした。したが、私は「そうです。『生命教育』を勉強にきています」と答えました。

男性は驚いて、「あなたはそう思つてるのでですか?」と問い合わせたので、「すべての患者やその家族も人生の師と見なしています。生命に関わるさまざまなことを教えてくださる人々であると、とても感謝しています」と私は答えました。

二十年前に私が台南成功大学付属病院でボランティアをしていたきっかけは、舅が入院していた時に八ヶ月付き添つて最期を見送ったことでした。その時病院で見つけた答えは、自分が重症患者とその家族の世話に向いているということでした。

●美容院を経営している郭淑菁は、笑いながら自分のお節介な性分は医療ボランティアに適していると言ふ。ふだんの生活の中でも常に周囲の人に関心を寄せている。

生はどこから来て 死後はどこへ行くのか

舅が病院で検査した結果、医師から末期の肺癌と告げられ、義兄たちは病名を舅に隠すことに決めました。義兄たちは病名を知つたら舅が自殺するのではないかと恐れていたのです。

舅は温和な人柄でした。もしも末期癌だと告げられたら、受け入れることはで

きないでしようか。こう疑問に思いましたが、皆に合わせなければなりません。

舅は「殺人も放火もしたことがないのに、こんな病に苦しめられるとは」と癌細胞が骨に転移した苦しみに耐えきれずに言いました。

真実を言えない私の心は痛み、「お父さん。私が嫁にきてからのお父さんは、誰に対しても優しく正直で、温かい家庭を築いて下さってありがとうございます」と言いました。いつか縁が尽きた時、お父さんに悔いは残らないと思いますが」と言いました。舅は「よく言つてくれた」と言つて、気持ちが落ち着き、しばらくして亡くな

りました。

看護師に痛みに耐えられない時のケア方法を聞いて、毎日食事を持つて行く時はできるだけ長く付き添つていきました。舅は私と話している時、死に對して少しも気にせず、「私が亡くなつた後、あんたが拌んでくれなくとも、私は少しも気にしないし、やはり嬉しいよ」と言いました。いつかは私たちと離れなくてはなりませんが、最期の時は安らかにと願いながら、悔いが残らないようなど心を込めて付き添いました。

しかしながら、舅のような善人がなぜ病に苛なまれなければならないのか、亡



くなつた後何を持つて、どこへ行くのか、
という疑問に私は困惑していました。

そして生命と因果報の道理に関する
上人の著作物を熱心に読みました。その
中でも『三十七道品講義』はとくに役に
立ち、その中で仏法を知ることができま
した。

美容院を戸締りしてから真夜中まで本
を読んでいるのを見て、夫は「大学の受験
勉強をしているのか」とからかいました。

読む前はただ主婦として、家庭を守り、
眞面目に美容院を経営することだけでした
が、生命の意義を理解して上人のおつ
しやる生老病死は自然の法則であり、死

た食事を食べようともせず、リハビリも
しようとせず、嫁は傍らに立つて手のほ
どこしようがありません。

私は「おじいさん、食べられることは
幸せですよ。折角嫁さんが持つてきて
いるのに食べなかつたら自分を苦しませて
いるのと同じで、リハビリもしなかつた
ら生んでくれた両親に申し訳がないです
よ。楽しい生活を送りたかつたらリハビ

後は何物も持つて行かれず、業のみが身
について行くのだと会得しました。その
「業」とは自分が書き下ろした人生でつく
つたもので、何者も代わりに書くことが
できない自分のまいた「因」であるから、
正しいことさえしていれば後悔がないと
いうことでした。

お節介の性格はボランティアの特 質

病室で舅に付き添つていた時は、隣の
ベッドの人にも関心を寄せていました。
中風患者のおじいさんで、嫁が持つてき



●郭淑善（右から4人目）は家でお茶会を開いて会員の声を聞き、慈濟のことを話す。目を患った何さんはボランティアたちに励まされて出てくるようになり、奥さんも仕事が見つかり、献金して人助けをするようになった。

リに努力することよ」と言葉をかけました。

た。

おじいさんは私の言ったことを聞いてくれたようで、冗談を言うと笑つたので、私はそのすきにお弁当をとつて匙で口に持つていくと口を開けて食べてくられました。

おじいさんが退院した後、病院でばつたり出会いました。診察を終えて帰るところでした。「もしもあなたに出会わなかつたら、私はこんなに回復できなかつたでしょう。本当にありがとう」と言われました。舅に付き添つた機会に私は自分のお節介癖を発見し、病院のボランティ

アに向いていました。
小さい頃は家が貧しい上に兄弟が多く、高等教育を受けられませんでしたが、父は近所で冠婚葬祭や困つた人がいると、仕事を置いて手伝いに行っていました。その性分がいつしか私の身についたのか、困つている人を見るといつお節介癖がです。高校を卒業後、十七歳で美容院へ習いに行きました。小柄な私は、ここで豊富な社会経験を身につけて、周りを和やかにさせる特技も得ました。

成功大学病院へボランティアに行つた時は、リハビリ科と腫瘍科が受け持ちでした。訓練を受けていたものの、患者に

対すると力不足を痛感して、命に対する態度をさらに理解しなければ、患者やそ

の家族のお手伝いなど何もできないと思いました。末期患者のケアのため、「緩和ケア」を学習の重点として、台北へ「アジア地区緩和ケア」の研修会に参加しました。

いいか分からぬ家族に対し、良い架け橋となるよう努力しました。

ある時、三十歳を過ぎた主婦に会いました。末期の肝臓癌に苦しんでいる夫がいらつしやるそうで、「夫は私に一言も言わないのでどうしていいか分かりません」と相談してきました。「ご主人を抱きしめてあげなさい」と言うと、「横になつているのにどうやつて?」と聞き返します。私はご主人を抱き起して座らせ、奥

成攻大学病院に緩和ケア病棟が設立されると、私は週二日ボランティアに行つていました。当時の舅を思い出して、心身の痛みに耐えられない患者やどうして

緩和ケアには抱擁が必要

口腔癌末期の患者は傷口の痛みがひどいだことと思います。

成攻大学病院に緩和ケア病棟が設立されると、私は週二日ボランティアに行つていました。当時の舅を思い出して、心身の痛みに耐えられない患者やどうして

く、私が行くと私の手を痛いほど握つて痛みをこらえていました。私を握つている手を妻の手に代えると、もう一方の手を出し、両手で妻の手を握りしめました。

次の週に行くと妻は片時も離れられないで髪のカットもできないと困っているので、私の専門である洗髪をして髪を切り爪もマニキュアしてあげると、ご主人は嬉しそうに紙に「とても綺麗だよ」と書いて、妻にあげました。この紙が形見になつたこと思います。

医療ボランティアとしての経験があつたので、慈濟委員の委員訓練を受けていた時、古参委員はよく貧困家庭の訪問ヶ

アに私を誘ってくれました。大方のケア対象者は病による貧困で、救済評価には私の経験が役に立つていました。

患者のいる家庭では病人に寝返りや助け起こし、車椅子に乗せる要領、着物や紙おむつの取り換えなどを教えて、家族の信頼感を得ていました。毎年私は花蓮慈済病院や大林慈済病院に短期の医療ボランティアに行っています。

二〇〇八年、台湾が金融危機に襲われたあたりを受け、慈善救済のケースが増えたので、成功大学病院のボランティアを週一日にして、地域の訪問ケアに当りました。医療ボランティアと慈善訪問

ケアに参加して私は多くのことを学び、言葉を慎み、相手の尊厳を守り、その人の身になつて耳を傾けることが非常に重要であることを学びました。

とともに、普段ボランティアとして奉仕している環境保全、医療ボランティア、訪問ケアなどの活動を知らせ、一緒に奉仕するように勧めました。

町の人々を誘つて一緒にやろう
二十年あまりボランティアの道を歩いてきて、私は自分の経験を人とも分かち合いたいと思いました。度々自宅でお茶会を開くことは、早期の委員が会員を勧誘するためのしきたりとなっています。私も自宅でお茶会を開いて会員の声を聴き、お互い家庭生活の知恵を分かち合う

私の住んでいる地区の近くに退役軍人の宿舎があります。そこに住んでいる主婦は、大部分が学歴もなく家が貧しいために、若くして年の離れた退役軍人と結婚していました。霞さんもその一人で、夫は年老いてできた子を溺愛し、夫婦のいさかいは絶えず、鬱病にかかる寸前でした。私は家庭訪問をして、彼女を地域の清掃活動に誘いました。

●血液腫瘍科の病室でボランティアたちは患者の話し相手になり、患者を自分の師として生命教育を学んでいる。右から2人目が郭淑菁。

時に道を掃きましたが、はじめは恥ずかしそうにしていました。私は「木の下に集まっておしゃべりしながら時を過ごす退役軍人のおじいさんたちの周囲が清潔になると気持ちがいいでしょう。それに蚊や蝇もなくなると、町の人々の健康にもいいのよ」と言いました。掃いている中に近所の人とも笑顔で挨拶を交わすように



なつて、その人たちも参加するようになりました。

霞さんが心を開いてくれたのを見て、慈済の環境保全への参加を勧めるとすぐに「いいですよ」と承諾してくれました。数日後に「空き箱などの回収物を慈済にくれる人がいます」と言つてきたので、私は「相手にはありがとうございます、そして一緒に地球を愛し、大愛テレビ局が世界に向かって放送するのを贊助しましようと言うのです」と教えました。

迷信を信じる秀さんという女性もいました。彼女を亡くなつた人の助念(通夜に八時間念佛を唱え死者の冥福を祈る台湾

の風習)に誘うと、死人に近づくのは怖いし念仏もできないからと言うので、皆の後ろで見ていなさいと言いました。何回か参加している中に、娘が「今日も助念に行くの? 邪気を払う芙蓉の葉は持つていかないの?」と言うと、秀さんが「忘れた」と笑っていました。私は秀さんに「上人は心に疑心暗鬼がなければ、心は平穀になるとおっしゃつておられるから、今の心は平穀だからいらぬのね」と言いました。

私は霞さんと秀さんに委員の研修を受けるよう勧めました。二人は講義の内容を聞いても理解できないし、筆記もでき

ないからボランティアだけでいいと言う

ので、それでは元の場所で足踏みしているだけで進歩しないから、研修の時に私が付き添つて教えてあげるからと勧めました。今では二人以外に地域で三十人余りの人が研修を終えて認証を受け、その中には夫婦が一組います。その後、秀さんは夜間小学校で勉強して卒業しました。どの人も潜在能力があつて、身分を気にせず勉強に励めば、充実した機会を得られるのだと思いました。



●

●

三十四歳で慈済に入つてから、毎月の配付日にはケア対象家族に理容の奉仕を行つていました。はじめ、ボランティア仲間のことを、「この人たちはお金の余裕があるのだろう」と思つていましたが、一緒に活動しているうちに、その人たちも私と同じように、普段は懸命に働いて生活を維持していることが分かりました。また、以前は素行が悪かつたり、姑との関係が悪かつたりした人が、慈済に入つてから生活の品質が改善されたことも知りました。

私は家に帰ると夫に慈済の活動で出会つた出来事を話します。夫は口べたで何

も言わないけれど、私の話すことはよく聞いてくれます。私たち夫婦とも学歴は高くないから、慈済の団体に入れば心が充実するはずだと思いました。

夫は一日中外で働き、家に帰つてくると休息するだけで、生活は単調で、本を読む習慣はありませんでした。私は慈済

にイベントの機会のあること彼に参加を勧めましたが、なかなか首を縊に振りません。そこで慈済の人たちにお願いして誘つてもらい、みなと付き合う中にだんだん視野が広がりか活発になりました。

私はボランティアとは大勢の人の中で修行するものと思つています。異なる社

(本文は慈済道侶叢書『もつといい自分に会つた』より抜粋)



戦勝の欲望

心を広く持ち、欲念煩惱のままにならず、
正しい方向を見失わないように

人の心が健康であれば、
大地は平穏になる

英國中央銀行総裁は先日、地球温暖化による災害とそれに起因する経済損失は、全人類に速い速度で「気候変遷」の災難性衝撃を与えると述べた。非営利組織「気候相互(ClimateInteractive)」は、地球の温度が三・五度上ると、全人類は適応できなくなると警告している。

朝会の時上人は、「地球が健康であつてこそ、人類は平穏になることができるのです。しかし微小な人類が大宇宙に対してもよくないことをすると、地球は発熱して病に冒され災難を引き起こします」と、おっしゃった。そして、人体の「小宇宙」と天地の「大宇宙」の道理は相通じるもので、病原菌が人体に入ると病気になり、人類が環境を破壊すると四大不調になると強調された。地球の健康は、全人類の心身健康があつてこそ維持できる。したがって地球の温暖化を防止するには各々の生活習慣からやらねばならない。分に安んじて己を守り、生活を簡素に、人や物を大切にして地球の健康回復に努めよう。



◎文・釋徳侃／訳・慈願

冬之衲履足跡



経蔵に深く入ると
悟り迷わない

あるボランティアが重病の同門に《地蔵經》を唱えて、健康になるよう励ました。上人は、病人が健康を取り戻すのは各自の因縁によるもので、他人の唱えた經によって厄を払つたり健康を取り戻したりすることはできないと開示された。

「読經は祈願のためにあるのではなく、自分に道理の了解を助けてくれるもので。多くの經典を読んで心に道理を吸収して、常に身、口、意を慎むように自分に促してこそ、真に法益を受けることができるのです」とお教えになつた。

そして《地蔵經》の中の、因縁果報の道理を深く理解して、自分を戒め、限りあるこの人生を把握して造福し精進すること。法を聴いて体得し、菩薩道に努め励んで智慧を高めること、そのす

べてが自分の収穫になるとお教えになられた。

教育によつて
人生が転じられる

「ネパール人の階級と姓名は一生変えることができない」と、ネパールに住む慈濟ボランティア馬坤達が話した。ある遠い山村では、階級の差が明らかになつてているだけでなく、男女の差別はさらに甚だしく、貧困家庭では女の子は未成年でも金持ちの家に下女として売られている。国連人権組織と現地の慈善団体はこの陋習を打破することに努めているが、人心の觀念は根強く困難である。

上人は、「二千年前シンドルタ王子は人生の様々な苦難と階級の不平等を感じられて、出家し道を求め、ついに悟つて仏になら

冬之衲履足跡



れました。仏陀の悟りは、衆生みなが仮性を具えているということとで、その「一生を衆生の説法と済度に尽くされました」と話された。

ネパールで強烈な地震が発生した後、慈濟は縁があつて仏陀の故郷へ救済し苦を助けたことは、仏陀の『慈悲等觀』の精神が仏陀の故郷に復帰することを願つていたからだ。

インドの企業家プミン・パリサン氏は今年二月、母を伴つて上人に帰依した。プミンは自分の出身は最も階級が低い「シユタラ階級」だったが、父母の努力によつて教育を受けることができ、社会で頭角を現すことができたと話した。上人はこれを例に上げて「階級の問題は改められないものではありません。教育を通じて階級不平等の問題は改革することができるはずです」とおつしやつた。

慈濟は現在、ネパールで希望工程（学校建設）の支援をしてい

て、上人は貧困家庭の子供たちが教育を受けて、将来貧困から脱け出し、運命が変えられるよう願つてゐる。

事を以て理を顯かに
法を以て古に帰る

上人は「苦難の衆生に心から奉仕すると同時に、人と人との間では法を用いること」と、中国の華東、華西からきたボランティアに、法を以て苦難憂慮をなくすように励まされた。

「法は奥深いものです。眞実の事相とは最も人の心を動かす『法』です」と上人は述べられ、世の中の事々は幻のように変化する虚無無常であつて、ただ法の理のみが永久不滅だと説かれた。「法は無体相で必ず人、事、物の譬えを用いて示している。この世の一切の事のありさまに仏法は含めておらず、必ず細心に体得



せねばならない

慈濟

は中国で救済や就学援助に二十数年間も苦労して、細心に種をまき福田を耕してきていることに、上人は「以前に困難を排して耕していかつたら、今日の成果はなかつたでしょう。この人々を感動させた事柄はさらに多くの奉仕する人を導きます。これもまた人々が法を大切にしなければならない所以です」と。

「慈濟宗門」は「静思法脈」に端を発し、確実な法脈があつたからこそ宗門を広く普及させることができた。上人は「狭い空間では外の境地は見えません。心を大きく広げると無限の天空大海が見えます。注意深く法を聞いて静思法脈を伝承し、慈濟宗門を世界に行き渡らせるのです」と。

「苦を見て己の福を知る」ことを、「十二因縁」の中の無明から始めてみると、累生累世の循環はとどまる所なく続いていることが理解でき、煩惱をなくすには、無明を滅^{めつ}するところから始めな

くてはならない。

上人は「人には各々習氣^{じつけ}があります。もしもことごとに自分の見解に捉われ、人に協力を押しつけると事ははかどらず、お互^いの協力がないと楽しくなれません」と述べられた。

勝ちたいという欲望を押さえなければ、心は絶えず無明煩惱の業を複製し、生生世世輪廻の苦に陥る。上人は「衆人は心を拡げて、広い世界に目を向け、欲念煩惱の浮き沈みに方向を失わせてはなりません」と諭す。

仏に学ぶ者で、最も重要なことは澄みきった心境をもつて、確かな方向に向かい、進んで人中に入つて天下の苦難の衆生に尽くすこと。慈濟人は同じ法の源から成り、林立している菩提の林は同じ根から生えている。上人は皆に仏法の根源に回帰し、常に法の中にいることを期待されている。

❖ 誰にも同じ日の光

今朝のお勤めで香しい法の薰りに満たされた時、まるで宇宙に抱かれているようでした。

「夜のじじまに星と月が姿を表し、その静けさの中に私は一人佇む」と上人はおっしゃいました。

夜の暗闇は私たちの周りを見えなくしてしまう、ただ日の光のみが万物を照らし出す光明なのです。

素晴らしい言葉に心踊りました。

ただ私はもう少し考えてみたのです。

夜の静けさを柔らかに照らす月の光、

その明るさに私は一人ではないと感じたのです。

時には、日の光をしのぐ温かさを感じたのです。

その頃何日か出かけることがあり、一日につかない所をたくさん清掃しました。

埃がたまつていて驚きましたが、

ここを清掃する機会に恵まれたことを、

また幸いに思いました。

そのおかげでやっと気がついたのですよ。

月の光は美しいけれど、柔らかすぎて、隅から隅までを照らすことはできない、



さうに思考を広げてみて、

気がつきました。

私たちにふりそそぐ月の光、

それも日の光の一部なのですね。

そう思うと、

もう夜にまぎれる必要はないのだと、

自分を励ますことができます。

自分に自信をもつていいのです、

誰もが無限の可能性をもつていいのです

から。

あなたも私も、

みな同じように日の光を受けているのです

すから。

慈濟大事記十一、十二月

訳・
済運

11・27

◎ヨルダンの慈濟ボランティアがザタリテント区で定期的な訪問を行

い、現地の30のケア世帯と17のシリア難民世帯に米と砂糖、豆、お

茶、食用油を配付した。

◎慈濟フィリピン支部は11月27日、29日及び12月6日にヌエバ

❖作者：凌宛琪（お板さん）。慈濟基金会の職員で、毎朝の「法の香に浸る」法会の入力作業を担当している。そして自身の心得をイラストを添えてインターネットで分かち合っている。



1 2 • 0 5	1 2 • 0 1	<p>◎慈済アメリカ・ダラス支部は地域内の公立学校の全てを訪問し7つの小学校で低所得者家庭の児童4000人に対して制服を配付する計画を立てた。即日、慈済ボランティアはスタークス小学校で第1回目の制服の配付を行った。</p> <p>◎イボラ出血熱と洪水に見舞われたシエラレオーネ共和国に対し、慈済は「生命はかけがえのないもの・手を携えて愛をシエラレオーネに」というスローガンの下に衣類を募る活動を始めた。慈済教育志業体の教師や学生と企業が呼応し、桃園、高雄の慈済ボランティアが1日から7日までと11日から20日まで静思堂で衣類の整理を行った。</p>
<p>アメリカニュージャージー州ブランドンズウイック市の「エリジヤズ・プロミス食糧配給所」で慈済ボランティアはホームレスに炊き出しを行うと共に、手袋と帽子、マフラーなどの防寒用品を配付した。</p>		<p>エシジャ省ガパン市とカバナチュアン市、ガバルドン町、ラウル町で合計2972世帯の台風コブ被災者に多機能折畳式ベッド（福慧ベッド）を配付した。</p> <p>25日、フィリピン、マンダルヨン市にある貧民地区で大火事が発生し、1000世帯以上の住民が被災した。慈済ボランティアは28日、避難所で米と毛布、食器類、衣類などの日用品を1396世帯に配付した。</p> <p>国連気候変動枠組条約パリ会議が11月30日から12月12日までパリで開かれた。慈済アメリカ総支部の曾慈慧副執行長と台湾大愛テレビニュース部気象報道の彭啓明主任らが代表で参加すると共に、報道関係者との懇談会に出席し、慈済の国際慈善経験及び環境保全活動の成果を披露した。</p>

1 2 • 0 6	1 2 • 0 9	1 2 • 1 7	<p>カンボジア慈済ボランティアはタケオ省サムラオン県で975の貧困世帯に米の配付を行った。</p> <p>◎イングランド北西部が4日から豪雨に見舞われ、イギリス慈済ボランティアは9日と19日に被災地のペンリス市を視察すると共に、日用品をカンブリア洪水ボランティアグループとケンドル町のキングス・フードバンクに寄贈した。</p> <p>◎慈済アメリカ・ノースカリリフォルニア支部とサンタロッサ連絡事務所のボランティアはレイクカウン年之久のミドルタウン・ユナイテッドメソディスト教会で大愛を広める集いを催し、9月の山火事被災者を招いた。彼らの生活に関心を寄せると共に歯科と漢方医の施療を行つた。</p> <p>台風モーリーがフィリピン中部を襲い、ノーザンサマール省とヌエバエシジャで被害が出た。慈済ボランティアは17日と19日に視察し、</p>
1 2 • 2 0	1 2 • 1 9		<p>22日にノーザンサマール省カタマン町で米と見舞金を配付した。</p> <p>ミャンマー、ヤンゴン北部で起きた洪水被害に対し、慈済ボランティアは9月中旬、モビ郡区とタイチ郡区で被災した農民に稻の種を配付したが、今月19日に2回目の配付を行つた。2016年5月までにタイチ郡区の16700人余りの農民に稻の種を配付する予定。</p> <p>◎中国広東省深圳市光明新区で20日昼頃、土砂災害が起き、80人余りが行方不明になった。広東慈済ボランティアはその日の午後から避難所に被災者を見舞つた。21日からは救助人員に炊き出しを行うと共にお茶と毛布などの物資を提供した。</p> <p>◎ドイツミュンヘンの慈済ボランティアはグラサウ市で歳末祝福感謝会を催した。280人のシリアやアフガニスタンなど10数カ国からの難民を招き、福慧お年玉と商品券を配付した。</p>

慈濟

2016年1月17日発行・229号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan



訳・済運・蔡志忠／彩色・
《清らかな智慧》より

善人になることは容易くありません。常に
善人である修養を持ち続けなければなりません。
善人よりもう一歩進めば、聖人です。

私は悪事をしたことはなく、自分では善
人だと思っています。善人である以外に、
聖人や賢人になる努力をすべく、正道を歩
むつもりです。

発行人 釋證嚴

発行所 慈濟基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈濟日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・張涵

校閲 山田智美

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9920

E-mail: 019874@tzuchi.org.tw

■

慈濟基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈濟に関するニュース等を
日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文
への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたない
ところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いに
存じます。（日文組編集同人）